

A Study on the Teaching of Reading as Communication at Junior High School: Focusing on Students' Reading Strategies and Teachers' Questioning Strategies

教科・領域教育専攻
言語系コース（英語）
藤岡正仁

指導教員 伊東治己

I 研究の目的

本論文では以下の4つを研究の目的としている。

- ① コミュニケーションとしてのリーディングの特質を明らかにする。
- ② 中学校におけるリーディング指導の基本的特徴を明らかにする。
- ③ 中学生が実際どのようなリーディング・ストラテジーを使用しているのか調べる調査について述べる。
- ④ それらの結果をもとに、コミュニケーションとしてのリーディングの指導の在り方について考察する。

II 論文の構成

本研究は6つの章から構成される。第1章の序論(研究の動機、目的、論文構成)に引き続き、第2章ではコミュニケーションとしてのリーディングの特質を明らかにするとともに、日本の学習指導要領と教科書におけるリーディングの扱いを明らかにする。第3章では中学生による読み方の調査を行い、中学生が使用するリーディング・ストラテジーの実態を明らかにする。第4章では、発問の目的と種類について述べ、リーディング・ストラテジーの使用を促進する発問方法の提案を現行の教科書を用いて行う。第5章では結論として研究のまとめを行い今後の課題を提示する。

III 論文の概要

中学校学習指導要領の改訂により、リーディングが目標に加わることによって、教科書で扱われているリーディング教材は以前に比べ充実したと言える。しかし、そのリーディング教材を使い、文章の読み方の指導がされているのかと言うとそうではなく、実際の多くはリーディング教材が、文章の読み方の指導ではなく、文法や語彙指導のために使用されているのが現状ではなかろうか。この疑問を出発点とし、コミュニケーションとしてのリーディング指導とはどういった指導かを明らかにし、中学生によるテキストの読み方の調査結果から、コミュニケーションとしてのリーディングの在り方についての研究を行った。

IV まとめと今後の課題

第1章の研究の動機を出発点とし、研究を進めてきた。第2章では、まず外国語教育における3つの時代とそれぞれの時代を代表する教授法についてまとめ、これらの教授法において、リーディングの扱い方の変化に着目した。その結果、文法訳読教授法におけるリーディングは、語彙、文法の定着を図るために行われ、Audio-lingual Approachにおけるリーディングは、リスニングやスピーキングなどを定着させるために行われ、Communicative Approachにおけるリーディングは、コミュニケーション能力を育成するための一つのスキルであるとされていることがわか

った。次の、昭和33年から平成20年までの学習指導要領における、外国語科の目標、リーディングの目標、リーディングの指導内容を分析し、その結果学習指導要領におけるリーディングは、年々コミュニケーションを意識した内容に変化してきていることがわかった。この事実が教科書にどのように影響しているのかを調べるため、検定教科書を6社分、過去3回分をそれぞれ第1学年から第3学年まで、リーディング教材の増減を調べた。その結果、学習指導要領が年々コミュニケーション的なものになると共に、ほとんどの教科書におけるリーディング教材の量は増えていることがわかった。この要因として、学習指導要領が年々コミュニケーションを念頭においたものに変化すると共に、リーディングはコミュニケーション能力を育成するための一つのスキルであると考えられるようになったためであると結論づけた。また、知識の時代、技術の時代、伝達教育の時代と、時代が移り変わるにつれ、教師中心の授業が少しずつ生徒中心の授業になっていった。その結果、学習者要因への関心の高まりなどにより、学習ストラテジーの研究が発展していった。この学習ストラテジーの研究は、Rubin(1975)、Stern(1975)のGood language learnerの研究に始まり、Oxford(1990)の包括的な学習ストラテジーの分類が広く認知、使用されていった。そしてOxfordの研究を受け継いだCohen(1998)はSecond language learner strategiesをSecond language learning strategiesとSecond language use strategiesに分け、後者の一つがCommunication strategiesであり、その中にReading strategiesが含まれるとした。こうして学習ストラテジーへの関心の高まりから、リーディング・ストラテジーへの関心も生まれていった。本研究において、このリーディング・ストラテジーが生徒のテキスト

の内容理解を促し、より深い読みを可能にすると考えた。

そして第3章では、中学生の使用するリーディング・ストラテジーに関する調査を行った。この調査から、成績上位群と下位群には使用するリーディング・ストラテジーに差が見られることがわかった。そして、成績上位群の使用するリーディング・ストラテジーの中でも使用頻度が高く、成績下位群と使用度に大きく差が見られたリーディング・ストラテジーを重点的に指導すべきリーディング・ストラテジーとした。

そして第4章においては、リーディング・ストラテジーを促す発問の提案を行った。まず、発問の目的を教師の為の発問と生徒の為の発問の2つに設定した。発問の種類は、Nuttallの発問を手がかりに発問の提案を行った。結論として、教師は生徒の実態に合わせて生徒のリーディング・ストラテジーを促すための発問を工夫することが大切であるということがわかった。生徒が教師の発問に対し、解答できなかった時に、比較的難易度の低い発問から生徒にアプローチすることで、生徒のリーディング・ストラテジーを促し続けることができると考えた。

今後の課題

本論文において、第3章で行った調査結果から、成績上位群の使用するリーディング・ストラテジーは成績下位群にとって内容理解の手がかりとなるといった仮定の下、第4章で発問の提案を行ってきた。しかし、時間の関係上、第4章で行った発問の提案が成績下位群のリーディング・ストラテジーを促すと立証できたわけではない。これを今後の課題とし、本論文を締めくくるものとする。